弘前大学教育学部紀要　第79号：23～33（1998年3月）
Bull. Fac. Educ. Hirosaki Univ. 79：23～33（Mar. 1998）

時間と出来事
―感覚と知覚のシンクロナイズ―

Time and Event
Synchronization of Sensation and Perception

矢　島　忠　夫*
Tadao YAJIMA*

論文要旨

「時間」について語られると，かならず，「主観的な時間」と「客観的な時間」，「生きられる時間」と「思考される時間」，「精神の時間」と「物質の時間」，「感じられる時間」と「科学の時間」等々の区別と差異が語られる。しかし，どうあっても，そのどちらかを「根源的な時間」，「ほんものの時間」とよび，どちらかを「派生的な時間」，「にせものの時間」とよばなければならないのだろうか。

「時間」とは，「出来事の流れ」である。そして，「出来事」は，事が成ること，「異なること」である。「それ自身で異なる」とは，「それ自身で変動する」こと，「それ自身に触発される」ことである。

「身体はそれ自身を外部から知覚する，と同時に，内部から感覚している。」本稿は，身体のこの「自己触発」に導かれ，二つの時間が「シンクロナイズする」可能性を探求する。

キーワード：時間，持続，自己触発，内部と外部，シンクロナイズ

一

「時間が流れる」と言われるとき，何が考えられているのだろう。たとえば，「時の流れに身をまかせる」と言っているとき，ひとは，「水が流れるものであるように，時間もまた流れるものであり，水の流れとともに木の葉が流されてゆくように，時間の流れとともに我が身もまた流されてゆく」と考えているのだろうか。

ある種の水の流れは，「川」と呼ばれる。「川がある」と言われるのは，たとえば，「相対的にたがいに独立に運動する水の諸部分が，浸透し融合しあい，いくつもの集まりが，その速さ，方向においてさまざまにゆらぎをみせながら，全体としては一定の幅の曲線や直線をえがいて，連続的に空間的位相を変えている」ときである。つまり，「水が流れる」，その「流れ」が「川」である。

しかし，「川が流れる」とも言われる。すると，「その川はどこを流れるのか」と問われる。

＊弘前大学教育学部社会科学科教室
Department of Social Studies, Faculty of Education, Hirosaki University

そして，「川の水は流れる，しかし，川そのものは流れない」と言われる。だが，それは，その「川」が，水の「流れ」と切り離され，水が流れることのできる「通路」として，したがって，水が流れても，流れなくても存在するはずの「空間」として，考えられているからである。だから，「川は流れない」と言うひとは，「空間は流れない」と言っているのである。「川が流れる」と言えるとすれば，それは，「川」が，単に水が流れる「場所」ではなく，水の「流れ」そのもの，あるいは，水が流れるその仕方，ある一定の「流れ方」として，考えられているからである。「川が流れる」とは，「川」という仕方で，「水が流れる」ことである。

では，「時間が流れる」とは，どういうことか。「時間が流れる」と言われるとき，その「時間」とは，何かがそこを流れる「川」なのか。それとも，川を流れる「もの」なのか。あるいは，この川の「流れ」そのものか。

「時間が流れる」とき，連続的に変化するのは，時間的位相である。たとえば，「今」（現在），「今より以前」（過去），「今より以後」（未来）である。あるいは，以前（過去）や，以後（未来）が，今（現在）から隔たる，その「度合い」である。ところで，時間的位相をもつのは，「出来事」である。連続的に時間的位相を変えるのは，出来事である。したがって，「時間が流れる」と言われるとき，流れる「もの」は，「出来事」である。「出来事が流れる」，その「流れ」，その「川」が，「時間」と言われているのである。「出来事が流れる」こと，その「川が流れる」こと，それが，「時間が流れる」ということである。

「出来事は流れる，しかし，その川は流れない」，だから，「時間は流れない」と言われるとすれば，それは，出来事の「川」，その「時間」が，出来事の流れから切り離され，出来事が流れることのできる「通路」として，したがって，出来事が流れても，流れなくても存在するはずの「空間」のようなものとして，考えられているからである。「空間は流れない，しかし，時間は流れる」と言えるとすれば，それは，「時間」が，単に，出来事が流れる「場所」ではなく，出来事の「流れ」そのもの，出来事が流れるその仕方，ある一定の「流れ方」として，考えられているからである。

「川が流れる」とは，（空間的な）「川」という仕方で，「水が流れる」ことである。「時間が流れる」とは，「時間」（的な川）という仕方で，「出来事が流れる」ことである。出来事が「時間（と呼ばれる川）を流れる」ことが，「時間的に流れる」ことである。このような仕方で「出来事が流れる」ことが，「時間が流れる」と言われているのである。だから，「時間」そのものが「時間という川を流れる」こと，時間が「時間を流れる」ことはありえない。「時間」が「時間的に流れる」こともありえない。

出来事の「時間的な流れ」が，「時間」である。そして，それが，「時間の流れ」である。だからと言って，出来事が，「時間」とは「別の川を流れる」こと，出来事が，「時間的」ではない「別の仕方で流れる」ことができるわけではない。「出来事の流れ」それ自身を「時間」と言うのである。「出来事の流れる仕方」を「時間的」と言うのである。

したがって，「時の流れに身をまかせる」と言うことは，「出来事の流れに身をまかせる」ことである。だが，「我が身」（mon corps）もまた，一連の「出来事」であり，それ自身「時間的に流れるもの」である。それぞれの出来事は，それぞれの仕方で，時間的に流れている。だから，「時の流れに身をまかせる」と言うことは，「ある一連の出来事の時間的な流れに，我が身の時間的な流れをシンクロナイズする」ことである。だが，そこには，時の流れに身をまかせているその我が身にシンクロナイズしきれず，それとなくズレを感じながら，かたわらから

ながめている，もう一つの我が身の流れがあることだろう。

二

「時間」とは何か。「出来事の流れ」である。そう，言われた。しかし，「出来事」とは何か。「生起する事」，「出来する事」，「生じる事」，「起こる事」である。「出来事が起こる」，「出来事が流れる」ことは，「事が起こる」こと，「事が流れる」ことである。しかし，「事が起こる」こと，「事が流れる」ことが，それ自身，すでに，「時間が経過する」こと，「時間が流れる」ことを意味している。しかも，「出来事」それ自身が，すでに，時間的な意味を含んでいる。したがって，「時間とは出来事の流れである」と言ってみても，「時間を定義した」ことにはならないだろう。だから，「時間」を，時間的な意味をもたない言葉によって，定義しようとしても，無駄であろう。

「出来事がある」，「事が起こっている」と言えるのは，「変化が起こっている」ときである。「事が起こっている」こと，それは，「生成変化が起こっている」ことである。「生成がある」，「変化がある」，「生成している」，「変化している」とは，「異なる事」，「異なる出来事が成立している」ことである。あるいは，「異なるという事」，「異なるという出来事が成立している」ことである。

つまり，「事（こと）」は，「異（こと）」である。「事」とは，「異なる事」，「異なる出来事」である。あるいは，「異なるという事」，「異なるという出来事」である。そして，「事」は，それ自身が，すでに，「事が成る」こと，「事が成立する」ことである。「異」は，それ自身がすでに，「異なる」こと，「異が成る」こと，「異が成立する」ことである。「異」は，「差異」である。「異なる」とは，「差異が成立する」ことである。だから，「事」は，「差異」である。「事が成る」，「事が成立する」とは，「差異が成る」こと，「差異が成立する」ことである。こうして，「事が-成る」ことは，「異が-成る」ことである。「事-なる」ことは，「異-なる」ことである。

「A が B に成る」とは，まずは，「A というものが自分自身と異なる B というものに成る」ことである。しかし，「自分自身と異なる」という「こと」，この出来事それ自身とは別に，A という「もの」が，あらかじめ，存在しているわけではない。「まず，自己同一的なもの（実体）が存在し，それが，後から，自己とは異なる別の自己同一的なもの（実体）に成る」のではない。自己は，あらかじめ，「自己である」のではなく，「自己と異なる」ことにおいて，はじめて，「自己に成る」のである。あるいは，「もの」は，あらかじめ，「もの」であるのではなく，「もの」と異なることにおいて，はじめて，「もの」に成るのである。

だから，「自己」は，「もの」として「ある」，「存在する」よりは，「こと」として「起こる」，「成る」，「生成する」のである。それは，「自己と異なるもの（と同一なもの）になってしまった」，その後で，はじめて，「自己と同一なものであった」ことに，「成る」のである。

「こと」は，それ自身が，「出来事」である。それは，「自分自身と異なる」こと，すなわち，「自己差異化する」ことである。[1] したがって，「もの」とは，「自己と異なることによって自己に成る」，その「こと」が，その（成る）「こと」を止めたその後に，自己であった「もの」として振り返って過去に投影された「潜在的な像」(image virtuel)，「虚像」である。[2]

三

「運動」の経験は，「運動している」ことの経験であろうか。それとも「運動した」ことの経験であろうか。[3] そのどちらかを「根源的な経験」とよび，どちらかを「派生的な経験」とよばなければならないのだろうか。

「身体」(mon corps) が運動しているとき，その運動は，その身体自身によって外部から知覚されている，と同時に，その身体自身の内部から直接的に感覚されている。[4]「感覚」は，自分自身の身体の「変動」(affection) の知覚として，それ自身すでに「感情」(affection) である。[5] だから，身体は，自分自身が「運動している」ことを，いわば「身をもって」知覚している。その知覚は，自分自身の運動の感覚，躍動感で彩られている。

多少とも持続する運動の知覚には，あそこからここまで「運動してきた」軌跡をふりかえり，ここからあそこまで「運動してゆく」行路をまちかまえる経験が，含まれている。しかしながら，身体が，自分自身が運動していることを「身をもって」知覚しているさなかに，その運動の「どのくらい」を，もっぱらその「内部から」，つまり，自分自身の運動の感覚，躍動感だけから，正確に測定しようとしても，不可能である。固定した外部の基準点がないかぎり，その「どのくらい」は，あくまでも「質的などのくらい」の感覚，ある「強さ」，「強度」(intensité) の感覚にとどまるだろう。その「どのくらい？」には，たとえば，「ずっと」「まだまだ」「あっというまに」「いやになるくらい」「びゅんびゅん」「のろのろ」，などと答えられるだろう。そして，その「どのくらい」は，運動する方向と強度にしたがって，一種のドップラー効果によって，いわば，そのつど「ひずみ」をもち，「ワープ」していることだろう。

他方，自分自身が運動していることを「身をもって」知覚しているのではない，純粋に外部の観測者なら，物体の運動を，これまで「運動してきた」軌跡からも，これから「運動してゆくであろう」行路からも切り離して，「思考する」ことができるだろう。しかし，物体の運動の軌跡や行路は，あらゆる物体が，何時でも，何処までも運動することのできる「通路」として，つまり，物体が運動しても，しなくても存在するはずの「同時性の空間」として，延長していることだろう。その運動の「どのくらい？」には，限定された延長，はっきりとした「数」によって答えることができるだろう。

一方は，「運動の知覚」，他方は「運動の概念」である。一方は，「知覚された運動」，「自分の身体の運動」であり，他方は「思考された運動」，「外部の物体の運動」である。

しかし，純粋に「思考する」観測者は，厳密に言えば，単に静止している観測者ではなく，身体をもたない観測者であるだろう。純粋に外部の観測者には，外部の物体も，その運動も，ありえないことだろう。したがって，いかなる運動の知覚も，観測も，ありえないだろう。

反対に，どのような観測者も，自分自身の身体の運動を，その外部から知覚している，「と同時に」，その内部から感覚している。だから，知覚される自分の身体の運動と，感覚される自分の身体の運動とは，はじめから，「シンクロナイズしている」のである。

観測者は，自分自身の身体の運動が外部の物体の運動にシンクロナイズしているそのかぎりで，外部の物体の運動を「知覚する」ことができるのである。そして，自分自身の身体の運動の「感覚」が外部の物体の運動の「知覚」に必然的にともなうそのかぎりで，観測者は，外部の物体の運動をいわば「感覚する」ことさえできるだろう。逆に，自分自身の身体の運動に外部の物体の運動がシンクロナイズしているそのかぎりで，観測者は，自分自身の身体の運動を

「思考する」ことさえできるだろう。

四

「時間」の経験は，「時間が流れている」ことの経験であろうか。それとも「時間が流れた」ことの経験であろうか。[6] そのどちらかを「根源的な経験」とよび，どちらかを「派生的な経験」とよばなければならないのだろうか。

「時間が流れている」ことを「身をもって」経験しているのは，どういうときだろう。たとえば，自分自身が「持続している」という経験は，どうだろう。「持続している」とは，「時間的に持続している」こと，「時間的に流れながら，同じ時間的位相を保持している」ことである。「持続している」とは，「過去になりながら，現在している」ことである。[7]「過去になる」とは，出来事が「過ぎ去る」ことである。「現在する」とは，出来事が「過ぎ去らない」ことである。「持続している」とは，出来事が「過ぎ去りながら，過ぎ去らない」こと，「過ぎさった出来事が，それ自身のうちに（en soi）保持されている」ことである。[8]

「川」が，自分自身を外部から知覚できる，と同時に，内部から感覚することもできるとすれば，それは，自分自身が「持続している」ことを感じるだろう。川は，「自分自身のうちを」自分自身が流れ，「自分自身のうちに」自分自身が保持されていると感じることだろう。自分自身が「持続している」と感じるものは，「自分自身のうちを自分が流れ，自分自身のうちに自分が保持されている」ことを感じているだろう。それは，自分が「川である」，自分が「流れである」と感じることだろう。

身体は，「持続している」かぎりで，身体である。そして，身体は，自分自身を外部から知覚している，と同時に，内部から感覚している。だから，身体は，自分自身が「持続している」ことを，「身をもって」感じているだろう。身体は，持続している「出来事」である。身体自身がそれである出来事は，身体自身のうちを流れ，身体自身のうちに保持されている。身体は，「自分自身のうちを出来事が流れ，自分自身のうちに出来事が保持されている」のを感じるだろう。それは，自分自身が「川を流れる出来事である」と感じるだろう。身体は，自分自身を「出来事が流れる川である」と感じるだろう。身体は，自分自身が「時間を流れる出来事である」と感じるだろう。身体は，自分自身を「出来事が流れる時間である」と感じるだろう。

身体は，自分自身のうちを「出来事が流れている」そのかぎりで，自分自身が「現在から過去へ流れている」のを感じるだろう。身体は，自分自身のうちに「出来事が保持されている」そのかぎりで，自分自身が「現在にとどまっている」のを感じるだろう。身体は，「自分自身から出来事が流れ出し，自分自身のうちにあふれかえる」そのかぎりで，自分自身が「前方へ，未来へと押し出されてゆく」のを感じるだろう。身体は，自分自身が「未来へと突き進んでいる」と感じるだろう。

しかし，身体は，自分自身を内部から感覚している，と同時に，外部からも知覚している。身体は，自分自身の持続が外部の物体の持続にシンクロナイズするそのかぎりで，自分自身が，「外部の時間の川を流れる内部の時間の川である」ことを，「学ぶ」だろう。

五

「自己自身と異なる」とは，「それ自身において」，「それ自身によって異なる」こと，「おのずから異なる」ことである。それは，「自己自身を異ならせる」こと，「自己自身を変動させる」(s'affecter)こと，すなわち，「自己自身を触発する」こと，「自己自身に触発される」(s'affecter)ことである。それは，「感動する」(s'affecter) こと，いわば「感情する」(s'affecter) ことである。[9)]

「自己触発」(affection de soi par soi) とは，「自己を内部から触発する」こと，「自己に内部から触発される」ことである。身体において「内部」と「外部」が，ことさら問題となるのは，身体が，「自己の外部から触発される」だけでなく，同時に，「自己の内部から触発される」ことによって，はじめて，「自己」でありうるからである。

「内部」は，内部と外部を分かつ「境界」が，それ自身に属していないかぎり，ある意味で「無限」である。「外部」は，それ自身に「境界」が属しているかぎり，ある意味で「有限」である。[10)]

「皮膚」を，身体と外部の物体の「境界」とすれば，身体にとって，「皮膚」は，自分の外部に属している。だから，自分自身を，皮膚に包まれた肉のかたまりだとすれば，身体は，自分自身を，外部の空間のうちに，他の諸物体と同じ資格で，しかるべき大きさや重さをもつ一物体として，位置づけることができるだろう。この身体をふくむ外部の物体は，相互に作用し，反作用しあっている。それらは，たがいに，外部から触発されている。

「境界」であるかぎり，「皮膚」それ自身は，身体の内部に属さない。内部である身体は，外部空間に取り囲まれ限界づけられていないそのかぎりで，無限であり，いわば「非空間的」である。あるいは，その内部空間は，「非外延的」(in- extnsif)，ないし「内包的」(intensif) である。身体は，内部から触発されているかぎり，自分自身の知覚，その「感覚」を，自分の外部の空間のうちに，「外延的に」(extensif) 位置づけることはできないだろう。

しかしながら，自分自身を，同時に，皮膚につつまれた水ぶくろとして，外部からも知覚できるかぎり，身体は，その「感覚」を，自分自身のしかるべき「場所」に位置づけることを，「学ぶ」だろう。鼻孔や気管，口腔から肛門へつづく消化管，身体のそこかしこの襞，それらは，ある時は，身体の内部に属し，またある時は，身体の外部空間に属している。たとえば，切り裂かれた傷口は，反転された内部を，外部からの触発にあらたにさらす「境界」となるだろう。

したがって，身体のいわば「非空間的な」内部空間は，外部空間からの無数の横断線に貫かれている。「非空間的な」身体は，それ自身の内部に，外部空間の無数の空洞をはらんでいる。こうして，身体は，内部と外部がそこにおいて相互に滲透しあう，いわば「準空間」となるだろう。[11)]

身体が，「自己の内部から触発される」ことができるのは，「触発する自己」が「触発される自己」と「異なる」からである。身体が，「自己に触発される」ことができるのは，それが，「自己と異なる」(différer avec soi) こと，「自己に遅れる」こと，「自己を延期する」(se différer) こと，「自己とずれる」ことにおいて，はじめて，「自己と成る」からである。身体は，自己として「生成する」ことによって，はじめて，「自己」である。

「自己触発する」(s'affecter) ことは，「感動する」こと，「感情する」ことである。「感情」

(affection) は，それ自身で「時間的な」出来事，「時間のかかる」出来事である。それは，「持続する」出来事，「長引く」出来事，「後を引く」出来事である。

コギトは，「瞬間的」である。明晰判明な知覚は，それ自身では，「持続」しない。「考えるわたし」の存在が疑いえないのは，わたしが考えているその「瞬間」(momentum) である。[12] 自分自身に先立つコギトが，自分自身に後れるコギトに，それ自身で触発され，「感動する」ことはないだろう。また，自分自身に後れるコギトが，自分自身に先立つコギトに，それ自身で触発され，「感動する」こともないだろう。先を行く瞬間と後れて来た瞬間とをつなぐのは，非連続な「瞬間的」コギトではありえない。それをつなぐのは，神による「瞬間的」創造の「連続性」である。コギトが，それ自身で，自己を触発し，自己に触発されることはありえない。コギトが，それ自身で「感情的」(affectif) であること，「持続的」であることは，ありえない。「身体」だけが，「感情的」，「持続的」でありうるのである。

六

身体が持続していることを身をもって経験しているさなかに，自分自身の持続の感覚だけから，自分自身の持続の「どのくらい」を測定しようとしても，不可能である。

身体のうちを「現在から過去へ流れている」出来事は，同時に，「現在にとどまる」身体のうちに保持されている。出来事は，たがいに浸透し，融合しあい，しだいにその強度をたかめながら，いわばひとかたまりの多様体となって，その流れの先端を未来へと押し進めている。そのとき，「あの時」と「この時」の時間的な「へだたり」を測定すること，いわゆる「時間を測定する」ことは，たがいに浸透し，融合している出来事を分断し，それらを同時性の空間に並列させることなしには，不可能である。

しかし，分断された「あの時」は，もはや，身体のうちを流れている出来事ではないだろう。分断された「この時」も，もはや，身体のうちに保持されている出来事ではないだろう。それらは，身をもって感じられている「持続」ではないだろう。他方，この持続の「どのくらい」は，あくまでも「質的などのくらい」，ある「強さ」，「強度」(intensité) の感覚にとどまるだろう。その「どのくらい？」には，せいぜい，「ずっと」「まだ」「もう」「あっというまに」「いやになるくらい」等によって，答えるしかないだろう。

では，「時間を測定する」とは，どういうことだろう。「時間を測定する」とは，出来事を「時計」にすることである。「出来事を時計にする」とは，ある出来事を「回帰する」出来事，「反復する」出来事として把握し，その「回帰」，「反復」の回数を数えることである。

回帰する出来事は，たとえば，「また朝になった」，「また満月になった」，「また太陽があの山の上空にきた」，「またあの星があの方角に見えるようになった」，などである。そして，この「また」の瞬間が，同時性の空間に並列され，その点が数えられるのである。あるいは，回帰する出来事は，「またこの棒の影が同じ角度だけ移動した」である。以前の棒の影は，すでに現在しない。しかし，以前の棒の影と現在の棒の影とのあいだの「時間のへだたり」は，同時に並在する二つの半径がつくる「角度」として，それ自身が，現在している。「時間のへだたり」が，「空間のへだたり」のうちに，「投影」されている。

他方，わたしが，砂糖がとけるのをじっと，あるいは，スプーンをまわしながらイライラと，「まっている」とすれば，[13] わたしは，「砂糖が持続している」ことを，あるいは「砂糖がとける

という出来事が持続している」こと，「砂糖がとけるのに時間がかかっている」ことを，「身をもって」感じている。そのとき，「時計」をもちだして，この砂糖がとける時間を，いわば「客観的に測定する」こともできるだろう。そうすれば，砂糖がとける時間は，わたしが「まっている」こと，その「待ち遠しさ」，さまざまな希望や失望の感情，そのいわゆる「主観的な思い」にはいっさい関わりなしに，「経過する」ことになるだろう。そして，「それこそが時間というものだ」と言うこともできるだろう。[14)]

しかしながら，そのとき，わたしが，時計の針が一秒ごとに進むのを見ながら，ゆったりと，あるいは，イライラしながら，「一秒，二秒……」と数えているとすれば，どうだろう。今度は，「時計の針が進むという出来事が持続している」こと，「回帰する出来事が持続している」こと，あるいは，「時計の針が進むのに時間がかかっている」こと，「反復の回数を数えるのに時間がかかっている」ことが，「身をもって」感じられているだろう。そこでは，外部の物体の「知覚」に身体の内部の「感覚」がシンクロナイズすることによって，奇妙なことに，「時間が経過するのに時間がかかる」という出来事が，いわば「身をもって」感じられているのである。

たとえば，反撃にさらされているサッカーの試合の終了間際に表示される計時メーターの数字の変化は，それ自身が「時間がかかる」出来事である。それは，「縮約され」(contracté) つぎつぎに積み重なり，しだいにその緊張をたかめ，まさに「痛みをもって」感じとられる「感情的」(affectif) な出来事である。ノーサイドの笛を「まっている」わたしの緊張が切れると，あるいは，出来事の「持続」が途切れると，そこに残るのは，回転を停止した計時メーター，同時性の空間に延長し一挙に見通される「時間」である。

その時間が，数え終えられた「無時間的な数」，純粋に「思考される数」にすぎないとすれば，そこには，外部の物体の知覚にシンクロナイズすべき，いかなる身体の感覚もないことだろう。

注

1) G.ドゥルーズ『差異について』平井啓之訳，青土社，1992.
Gilles Deleuze, *La Conception de la Différence chez Bergson*, Bergson in Les Philosophes célèbres, dir.par Merleau- Ponty, Ed.Lucien Mazenod, 1956.
「持続とは，自己に対して差異を生ずるもの (ce qui différe avec soi) である。」
「持続とは差異を生ずるものであり，差異を生ずるものはもはや他のものとの間に差異を生ずるのではなくて，それ自らとの間に差異を生ずるものである。差異を生ずるものがそれ自体一つの事物，一つの実体となったのだ。」(40－1頁，p.80.)

2) H.ベルクソン『思想と動くもの』矢内原伊作訳，ベルグソン全集第7巻，白水社， 1965.
Henri Bergson, *La Pensée et le Mouvant*, 1934. OEUVRES, Edition Du Centenaire, P.U.F. 1959. 以下「全集」と"OEUVRES"の頁数を示す。
「可能的なるものとは過去に映った現在の幻影です。」「それはあたかも，鏡の前に歩み寄ってそこに映った自分の像を認め，鏡の後ろに立ったならばその後ろに触れ得たであろう，と想像するのと同じです。」(127頁，p.1341.)

3) H.ベルクソン『時間と自由』平井啓之訳，全集第1巻
Henri Bergson, *Essai sur les Données Immédiates de la Conscience*, 1889.
「しかしここでもまた相互滲透作用 (endosmose) が生じ，純粋に運動性の強さにかかわる感覚と通過された空間の外延的表象とのあいだの混同 (mélange entre la sensation purement intensive de mobilité et la représentation extensive d'espace parcouru) が生ずる。」「われわれの意見では，運動と運動体が通過した空間とのこのような混同 (confusion) から，まさに，エレ

ア学派の詭弁も生まれたのである。」(107頁, p.75.)

本稿の基本的な姿勢は，この「侵入」(endosmose)，「混合」(mélange)が生じうることに積極的な意味を見出そうとするところにある。したがって，本稿の考察は，ベルクソン解釈としての正しさを要求するものではなく，それとは相対的に独立にすすめられる。

以下のいくつかの「注」も，本稿の論拠とするためではなく，本稿の問題設定をしかるべく位置づけることをめざしている。

4）H.ベルクソン『物質と記憶』田島節夫訳，全集第2巻
Henri Bergson, *Matière et Mémoire*, 1896.

「私がたんに外から知覚によって知るばかりではなく，内から感情によってもまたそれを知るという点で，他のすべてのイマージュからはっきりと区別されるイマージュがひとつある。それは私の身体である。」(19頁，p.170.)

5）H.ベルクソン『物質と記憶』田島節夫訳，全集第2巻
Henri Bergson, *Matière et Mémoire*, 1896.

「いま極限まできて，距離がゼロになる場合，すなわち知覚すべき対象が私たちの身体と一致する場合，つまり私たち自身の身体が知覚すべき対象である場合を仮定してみよう。すると，このまったく特殊な知覚があらわすのは，もはや潜在的な作用ではなく現実的作用であろう。感情とはまさしくこれなのだ。」(66頁，p.205.)

6）H.ベルクソン『時間と自由』平井啓之訳，全集第1巻
Henri Bergson, *Essai sur les Données Immédiates de la Conscience*, 1889.

「たしかに，一たび時間が流れたときにも，われわれは，その継起する各瞬間を互いに外在的なものとして思いうかべ，そうすることによって空間を横切る線を思う権利ももっている。しかしこの線が記号としてあらわすものが，流れつつある時間（le temps qui s'écoule）ではなく，流れ去った時間（le temps écoulé）であることは当然のこととして変わらぬであろう。」(167頁，p.121.)

「〈時間は空間によって十全にあらわされることができるだろうか。〉――これに対してわれわれは次のように答える，流れ去った時間（le temps écoulé）が問題ならば，そのとおりだが，流れつつある時間（le temps qui s'écoule）について言うのなら，そうではない，と。」(202頁，p.145)

7）H.ベルクソン『精神のエネルギー』渡部秀訳，全集第5巻
Henri Bergson, *L'Énergie Spirituelle*, 1919.

「どうしてすべてが終わったときにはじめて回想が生ずるのだろうか。またどうして記憶はそのはたらきのある瞬間に，すべてが終わっていないこと，まだ何かが残っていることを知るのだろうか。そのことを考えれば考えるほど，回想が知覚そのものにつれてつくられるのでないかぎり，回想の発生は理解できなくなる。」(155頁，p.914.)

G.ドゥルーズ『差異と反復』財津理訳，河出書房新社，1992.
Gilles Deleuze, *Différence et Répétition*, P.U.F. 1968.

「ある現在は，現在である〈まさにその時に〉過ぎ去っていたのでなければ，いつまでたっても過ぎ去らないであろう。ある過去は，現在であった〈まさにその時に〉まず過去になっていたのでなければ，いつまでたっても過去にならないだろう。」(135頁，p.111.)

Gilles Deleuze, *Cinéma 2, L'Image-Temps*, Minuit, 1985.

「現在は，それがもはや存在しないとき，新しい現在がそれにとってかわるとき，過去になるのだ，と言うことはできる。しかし，そんなことでは，何も言ったことにならない。新しい現在がやってくるためには，まさに現在が過ぎ去ることが必要である。現在は，現在であると同時に，現在であるその瞬間に，まさに過ぎ去るのでなければならない。だから，イメージは，一度に，同時に，現在であり過去であること，まだ現在しもう過ぎ去っていることが必要である。イメージが，現在であると同時にすでに過去であったのでなければ，現在はいつまでたっても過ぎ去らないであろう。過去は，現在に継起するのであり，もはや現在ではない，というわけではない。過去は，それが現在であった，その現在と共存しているのである。現在は顕在的なイメージであ

る。そして現在と同時のその過去は，潜在的なイメージ，鏡のなかの像である。」(p.105-6.)

8) H.ベルクソン『物質と記憶』田島節夫訳，全集第2巻
Henri Bergson, Matière et Mémoire, 1896.
「過去がそれ自身で残存する（survivance *en soi* du passé）というこのことは，したがって，どんな形にせよ，免れるわけにはいかない。」(169頁，p.290.)
H.ベルクソン『創造的進化』松浪信三郎・高橋充昭訳，全集第4巻
Henri Bergson, *L'Évolution Créatrice*, 1907.
「過去は，ひとりでに，自動的に，保存される。」(21頁，p.498.)

9) B.スピノザ『エティカ』工藤喜作・斎藤博訳，中央公論社，世界の名著25，1969.
Baruch Spinoza, *Ethica*, Spinoza Opera 2, Carl Winter Universitätsverlag, 1925.
「感情（affectus）とは，身体そのものの活動力（agendi potentia）を増大させたり減少させたり，あるいは促したりまた抑えたりするような身体の変様（corporis affectiones）であると同時に，そのような変様の観念でもあると，私は理解する。」(第三部定義3)
「人間の身体は，自己の活動力を増大させたり，減少させたりするようなさまざまな仕方で刺激をうける（posse mulutis affici modis）ものであり，またその活動力が増大も減少もしないような別の仕方でも，刺激をうけることがありうる。」(同公準1)
G.ドゥルーズ『スピノザ』鈴木雅大訳，平凡社，1994.
Gilles Deleuze, *Spinoza, Philosophie pratique*, Minuit, 1981.
「具体的に個々の身体や思考を,ひとつひとつの触発しまた触発される力（les pouvoirs d'affecter et d'être affecté）として規定してみたまえ。ものごとはずいぶんちがってくるだろう。動物であれ人間であれ，これをその形やもろもろの器官や機能から規定したり，主体として規定したりせずに，それがとりうるさまざまな情動(les affects)から規定するようになるだろう。」(218頁，p.166.)

10) 森敦『意味の変容』，ちくま文庫，筑摩書房，1991.
「任意の一点を中心とし，任意の半径を以て円周を描く。そうすると，円周を境界として，全体概念は二つの領域に分かたれる。境界はこの二つの領域のいずれかに属さねばならぬ。このとき，境界がそれに属せざるところの領域を内部といい，境界がそれに属するところの領域を外部という。」(23頁)
「内部は境界がそれに属せざる領域だから，無辺際の領域として，これも全体概念をなす。したがって，内部＋境界＋外部がなすところの全体概念を，同じ全体概念をなすところの内部に，実現することができる。つまり壺中の天でも，まさに天だということさ。」(23-4頁)
「円内の任意の点には，必ずこれに対応する円外の点がある。」「すなわち，内部は外部と対応する。」(25頁)
「内部は境界がそれに属せざる領域なるが故に密蔽されているという。且つ，内部は境界がそれに属せざる領域なるが故に開かれているという。」(26頁)

11) H.ベルクソン『時間と自由』平井啓之訳，全集第1巻
Henri Bergson, *Essai sur les Données Immédiates de la Conscience*, 1889.
「継起は，過去を記憶して二つの振動あるいはそれをあらわす記号を補助的空間（un espace auxiliaire)内に並置する意識をもった目撃者にとってのみ存在する。――ところで，この外在性なき継起と継起なき外在性とのあいだには，ちょうど物理学者が滲透現象（un phénomène d'endosmose）と呼ぶものによく似た，一種の交流（une espèce d'échange）が行われる。」(104頁，p.73.)
「まず，現実の空間が存在し，持続は欠けているが，そこではさまざまな現象がわれわれの意識状態と同時に（simultanément avec nos étas de conscience）あらわれたり消えたりしている。また現実の持続というものが存在し，その異質的な瞬間はお互いに浸透し合っている（se pénètrer）が，しかしその各瞬間はそれと時を同じくする（contemporain）外部世界の状態に近づけられて，この接近自体の効果(l'effet)によって他の瞬間から分離されることもできる。」(105頁，p.73.)

12) R.デカルト『ビュルマンとの対話』，三宅徳嘉・中野重伸訳，デカルト著作集第4巻，白水社，1973.

René Descartes, *Correspondance, Descartes et Burman*, OEUVRES 5, J.Vrin, 1974.

「思考が瞬間に（in instanti）なされるというのも誤りです。なぜならすべて私の行為は時間においてなされ，そして私は同じ思考において或る時間のあいだ持続し継続する（cntinuare et perseverare per aliquid tempus）と言えるからです。」(342頁，p.148.)

したがって，「コギトは持続しない」，あるいは「瞬間的である」とは，以下の意味においてである。

R.デカルト『省察』所雄章訳，著作集第2巻

René Descartes, *Meditationes de Prima Philosophia*, OEUVRES 7, J.Vrin, 1983.

「生涯の全時間は無数の部分へ分割されることができ，そしてその一つ一つの部分は残りの部分へはいかなる意味でも依拠してはいない。」「何らかの原因が私をいわば再度この瞬間に創造する，言いかえるならば私を維持する，というのでないかぎりは，少し前に私があったということからは，私が今あらねばならぬということは帰結しない。」「どのような事物（もの）であろうとも，それが持続するところの一つ一つの瞬間（momentum）において維持されるためには，このものがまだ存在してはいないとした場合に，これを新たに創造するに必要なのと全く同じ力と活動とが必要である。」(67頁，p.49.)

13) H.ベルクソン『創造的進化』松浪信三郎・高橋充昭訳，全集第4巻

Henri Bergson, *L'Évolution Créatrice*, 1907.

「一杯の砂糖水をこしらえようと思うならば，私はとにもかくにも，砂糖が溶けるのを待たなければならない。」「私が待たなければならない時間は，私の待ち遠しさと，いいかえれば，思いのままに伸縮されえない私自身の持続の或る一部分と，一致する。それはもはや思考される時間（le pensé）ではなく，生きられる時間（le vécue）である。」(27頁，p.502.)

H.ベルクソン『思想と動くもの』矢内原伊作訳，全集第7巻

Henri Bergson, *La Pensée et Le Mouvant*, 1934

「コップ一杯の砂糖水をつくろうとすれば，どうしても，砂糖が溶けるのを待たねばならない。」(21頁，p.1262.)

14) 中島義道「持続と時間のあいだ」，『現代思想』VOL.22-11.1994.

「私が時間とは何かを知っているとは，時間とは〈待ち遠しさ〉という心理状態とは別のもの，すなわち〈待ち遠しさ〉にもかかわらず経過するものであることを知っていることである。」(238頁)

(1997.12.26受理)